

主日礼拝説教「何者か分からなくても」

日本基督教団石神井教会 2018年3月4日

【旧約聖書日課】イザヤ書 48章1～8節

1 ヤコブの家よ、これを聞け。

ユダの水に源を發し、イスラエルの名をもって呼ばれる者よ。
まこともなく、恵みの業をすることも無いのに、
主の名をもって誓い、イスラエルの神の名を唱える者よ。

2 聖なる都に属する者と称され、

その御名を万軍の主と呼ぶイスラエルの神に依りすがる者よ。

3 初めからのことをわたしは既に告げてきた。わたしの口から出た事をわたしは知らせた。
突如、わたしは事を起こし、それは実現した。

4 お前が頑固で、鉄の首筋をもち、青銅の額をもつことを知っているから

5 わたしはお前に昔から知らせ、事が起こる前に告げておいた。

これらのことを起こしたのは、わたしの偶像だ、
これを命じたのは、わたしの木像と鑄像だと、お前に言わせないためだ。

6 お前の聞いていたこと、そのすべての事を見よ。自分でもそれを告げうるではないか。

これから起こる新しいことを知らせよう、隠されていたこと、お前の知らぬことを。

7 それは今、創造された。昔にはなかったもの、昨日もなかったこと。

それをお前に聞かせたことはない。
見よ、わたしは知っていたと、お前に言わせないためだ。

8 お前は聞いたこともなく、知ってもおらず、耳も開かれたことはなかった。

お前は裏切りを重ねる者、生まれたときから背く者と呼ばれていることを
わたしは知っていたから。

【福音書日課】マルコによる福音書 8章27～33節

²⁷イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。²⁸弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」²⁹そこでイエスが尋ねになった。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」³⁰するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。

³¹それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。³²しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いきめ始めた。³³イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

「サタン、引き下がれ」

2月に教会創立の祝いと定期教会総会を終えて、わたしたちの教会の3月の歩みは、教会の原点に立ち返りつつ、4月からの新しい年度の歩みに備える一カ月として与えられています。この月は、また、ほぼ必ず「受難節（レント）」と重なる季節です。受難節は、主イエス・キリストのご復活を祝うイースター（復活祭）の前の四十日余りの備えの期節、悔い改めと克己の祈りの期節です。また、教会の交わりの中で間もなく洗礼の恵みにあずかろうとしている者と共に歩む期節です。すでに洗礼を受けた者も含めて皆が十字架で死なれ三日目にご復活なさった主イエスに導かれて、あらためて、自分を捨て、自分の十字架を背負って主イエスに従う者として整えられ、新しい命の御業へと導き出していただく希望を新たにす期節です。このような期節が、わたしたちの教会の新年度に備える時期に重ねて与えられているのです。

受難節は、日曜日を除いて四十日を数えるように定められてきました。主イエスが荒れ野で誘惑を受けられた四十日に重ね合わせているのです。そこで、教会は、受難節の最初の日曜日に必ずと言ってよいほど、主イエスが受けられた荒れ野の誘惑の出来事を、福音書日課として聞いてきたのです。わたしたちの教会は、今年、その日に創立記念礼拝を祝い、別の御言葉を聞きましたが、9時からの教会学校礼拝では、荒れ野の誘惑の出来事を聞いていました。「イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた」（マルコ 1:13）。そのときから三週目の今日まで、わたしたちに与えられた福音書日課は、続けて「サタン」を取り上げています。「サタン」の問題こそ、受難節にわたしたちが取り組むべき課題であるというのです。

「サタン、引き下がれ」。この、弟子のペトロを叱って言われた主イエスの御言葉の部分で、今日の福音書朗読が終わっていました。多くの皆さんは、この後に、主イエスの大切な教えが続くことをご存じでしょう。主イエスは、弟子たちだけでなく人々をも呼び寄せて、教え始められたのです、「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（34節）と。それが命を得る道だと、主イエスは続けられるのです。わたしたちが決して忘れてはいけない、大切な教えだと言ってもよいでしょう。実際、マルコ福音書は、その教えを、福音書全体のまさに中心に置いているのです。わたしたちは、その部分が朗読されなくても、今日の朗読箇所までを聞けば、ほとんど自動的に、この大切な主イエスの教えを思い起こすことができるはずです。けれども、そうであるから朗読が長くならないように省略されていた、というわけではないのです。「サタン、引き下がれ」。この、主イエスがペトロを叱ってお告げになられた御言葉をこそ、今日、わたしたちが心に留めるべきであるからこそ、わたしたちは、ここで朗読を聞くのを終えたのです。

「サタン」の問題を避けて通ることはできません。主イエスご自身も、サタンから誘惑を受けられた、というのです。主イエスも向き合われたという「サタン」に、わたしたちは、この期節、向き合うように導かれているのです。

「だれにも話さないように」

実のところ、「サタン」のことを話し始めると、途端に関心が無くなる方もあるかもしれません。「サタン」のような超自然的な悪の存在は、現代人のわたしたちにとっては、迷信のようなものだと言うのです。あるいは、そうでなくても、「自分はサタンとは関係ない」と思われている方は、案外いらっしゃるものです。

そうであっても、自分が「サタン」呼ばわりされて平気な方は、少ないと思います。冗談ならともかく、何か言い争いでもした挙句に、誰かに「サタンよ、出ていけ」と面と向かって言われたら、その人との関係は、そこで壊れてしまうことでしょう。実際、教会の中でそのような言葉を発して互いの関係が壊れてしまったという話を、わたしは幾例か知っています。「サタン」と告げる言葉は、それほど強い調子の言葉なのです。

主イエスがペトロに「サタン」と告げられたとき、ペトロは、どのように受けとめたのでしょうか。わたしは、ペトロがこのとき、素直に「しまった」と反省したとは思えません。主イエスに対して、強く反発を憶えたのではないかと思うのです。主イエスとの関係が壊れた、と言ってもよいと思います。ペトロは、それほど強い言葉を告げられたのです。

そうだとすると、主イエスは、このとき不注意にも「サタン」と口にしてしまった、ということではないでしょう。ペトロの言動に腹を立てて、勢い余って、「このサタンめ」と罵ったというのは、わたしならあり得るかもしれませんが、主イエスは、そうではなかったと思います。もう少し冷静に、しかも、はっきりと意図をもって「サタン、引き下がれ」と、ペトロに告げられたのです。

実は、この場面で、主イエスが弟子を叱られたのは、二度目です。直前に、主イエスは、弟子たちに問うて「**人々は、わたしのことを何者だと言っているか**」と言われて、答えさせていました。そして、「**あなたがたはわたしのことを何者だと言うのか**」とも問われて、ペトロから「**あなたは、メシアです**」という答えを引き出していました。「ペトロの信仰告白」の場面と呼んだりするところです。

たしかに、ここには、ペトロの信仰告白があると行ってよいでしょう。同じ場面を伝えるマタイ福音書(16章)は、はっきりとそのことを伝えています。けれども、わたしたちが今日朗読を聞いたマルコ福音書は、どうも様子が違います。ペトロの「あなたは、メシアです」との応答を聞いても、主イエスは、お喜びにもならず、お褒めにもならず、むしろ、「**ご自分のことをだれにも話さないように**」と、弟子たちに釘を刺されたのです。しかも、それは、かなり強い調子でなされたことのようにです。「**弟子たちを戒められた**」と訳されていますが、この「戒められた」と訳されている言葉は、後でペトロに「サタン、引き下がれ」と告げられたときの「**叱って**」と訳されている言葉と、まったく同じ言葉なのです。主イエスは、「あなたは、メシアです」と答えたペトロを前に、弟子たちを叱って「だれにも話さないように」と言われていた、というのです。

主イエスは、繰り返し弟子たちを叱られて、黙らせられたのです。「サタン、引き下がれ」と、ペトロを叱って、黙らせられたのです。

「必ず多くの苦しみを受け」

実は、この場面で、主イエスのほかに一人、同じように叱って言うものが描かれています。ペトロです。「**ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた**」と描かれている「いさめ」という言葉も、まったく同じ言葉で、「叱る」という意味の言葉で描かれています。

まったく、どうしてしまったのでしょうか。この場面は、素晴らしい信仰告白の場面であるどころか、主イエスと弟子たち、ことにペトロが、まるで対立し合っているかのように、叱り合っているのです。そして、その挙句の果てが、主イエスのペトロに対する「サタン、引き下がれ」の言葉だったのです。

主イエスはこのとき、極端な言い方をすれば、弟子たちとの関係を一度、壊してしまおうとなさったのでしょうか。あるいは、主イエスは、弟子たちの主イエスに対する一方的な期待を、打ちのめそうとなさったのではないのでしょうか。

弟子たちは、はっきり言って何もわからないまま、主イエスに従って来ていたのです。ただ「わたしについて来なさい」と呼びかけられて、何の準備もなく、主イエスに従い始めたのです。主イエスは、それでよいから従いなさいと、今までおっしゃられていたのでしょうか。けれども、その弟子たちが主イエスに従い続けるには、どこかで乗り越えていかなければいけない壁があったのです。

弟子たちには、何も考えずに従い始めたとは言っても、すでに従って来ているのですから、これまでに自分たちなりに期待している主イエスのイメージがあったでしょう。それは、他の人々が主イエスに対して抱く期待と、実のところ大差ないものであったかもしれません。「主イエスは、洗礼者ヨハネだ」とか、「エリヤだ」とか、「預言者の一人だ」とか。もちろん、弟子たちの期待は、それよりは、主イエスの本当の姿を的確にとらえたものだったかもしれません。「あなたは、メシア・キリストです」。事実、わたしたちは、その弟子たちの信仰告白を受け継いで、主イエスを「キリスト」とお呼びしているのです。けれども、「キリスト」とお呼びすることさえ、すでに、弟子たちの中の勝手な期待が込められていたのではないのでしょうか。しかし、そのような期待は、捨てられなければならないのです。勝手な期待で膨らませた「キリスト」は、偶像にすぎないのです。

しかし、主イエスは、「**必ず多くの苦しみを受け**」られるのです。人々から「**排斥されて殺され**」るのです。そのような苦しみの道に、「あなたも従って来ないか」と、主イエスはおっしゃられるのです。「それは、あなたの期待する道ではないかもしれない。あなたは、苦しみたくないかもしれない。苦しむことから逃れる道、人と衝突したりせず、命を削られるような難題に向き合うことも求められない、平穏な道を、あなたは期待しているかもしれない。そのようところに導いてくれる者として、わたしを見ているかもしれない。しかし、そうであるならば、あなたとの関係を一度、壊さなければいけない。わたしの道は、苦しみを受ける道だから。その道に、ついて来てほしいのだから。」主イエスは、そうおっしゃられて、厳しくも深い愛をもって、お告げなのです、「**サタン、引き下がれ。あなたは、神のことを思わず、人間のことを思っている**」と。